

研究報告
(研究プロジェクト)

メダリストへの軌跡 —相原信行 選手—

大河原 裕 迪 (スポーツ文化学群)

波多腰 克 晃 (スポーツ哲学研究室)

本稿は、「研究プロジェクト：日体大とオリンピックの関わり」の一環として実施した、メダリストへのインタビューをもとに構成されている。

本インタビューは平成28年12月14日(水)に行い、相原信行氏は故人のため、遺族の相原俊子氏にお話を伺った。

【経歴】

1934年(昭和9)12月16日(生)～2013年(平成25年)7月16日(没)

出身：群馬県

競技：体操競技

1953年～1955年 群馬県立高崎工業高等学校

1955年～1958年 日本体育大学 体育学部 体育学科

1958年～日本体育大学 助手

体操大使(南米五カ国)

1967年～1968年 ベネズエラ代表コーチ

1968年～1986年 足利工業大学

1969年 砂利採取販売業 経営(父の後を継ぐ)

1973年 相原スポーツ店 開店

1979年 相原体操クラブ 開講

1986年 上武大学

【競技歴】

1956年 メルボルンオリンピック：団体総合／銀，種目別徒手／銀

1960年 ローマオリンピック：団体総合／金，種目別徒手／金

1962年 モスクワ選手権：団体総合／銀，種目別つり輪／銀

1. 競技との出会い

相原信行氏と体操との出会いは、今日のトップ選手の様に幼少期からではなく、群馬県立高崎工

業高等学校に通った高校1年生のときであった。始めた当初は、恩師の大橋先生から、「おまえの体はあまりに硬いんで、体操には向いてないから」、「器械体操はおまえ無理だから、団体体操で

もやっつけ」と言われていた。これが、相原信行氏の器械体操競技との出会いであった。当時は、現在のように身の回りにスポーツ環境はなく、山遊びやキャッチボール等、体を動かすことはあれども幼少期から専門的に器械体操を行う環境はなかった。しかし、凝り性で努力家の彼は、先生の言葉通り団体体操での柔軟や補強を通して、2・3年生の頃には、得意のつり輪を武器にインターハイで上位を争う選手になっていった。

2. 日体大の思い出（選手生活の思い出）

学生から助手までの彼の日体大での生活は、正に“体操の虫”で、24時間体操のことを考える生活であった。夜中であってもアイデアが浮かんだらすぐに実行するために、合宿所の部屋にまであん馬や倒立バーを持ち込み練習していたという。

また、合宿所で生活をしていたこともあり、体育館の鍵を開ける、そして閉めるというのが日課になっており、1日14時間以上体育館で練習に明け暮れていた。“相原に会おうと思ったら体育館に行ったら必ず会える”。これは当時の学長である栗本義彦先生が語った言葉である。その言葉通り誰よりも体育館に長くいた人物であった。

3. メルボルンオリンピックのメダル獲得

日体大に入学してからの日々は、ひたすら練習に打ち込み大学の3年生のときにメルボルンオリンピックに出場した。

彼の演技への追求は、練習や技術だけではなく審判からの見え方にも気を配るものであった。O脚がかなりひどかった彼は、審判からの見栄えをよくするために自分で作成したパッドを膝の内側へ当てて演技を行っていた。演技を行いやすくするためのサポーター等ではなく、見栄えのためだけの物なので当然演技への支障があった。更なる高みを目指すため、自身の弱点を捉えアイデアや工夫、そして努力で不足分を補った。そうして掴

んだ銀メダルであった。

4. ローマオリンピックのメダル獲得

メルボルンオリンピックで団体、個人のゆかで2位になっていた彼の目標ははっきり決まっていた。彼の目に映るのは金メダルだけであった。朝6時半に体育館を開け、体育館を閉める夜8時まで練習を重ねた。人の倍、3倍、誰よりも厳しい練習を自分に課していた。その成果の一つが片手倒立である。

宿願の団体総合優勝を果たした瞬間は、仲間の選手と肩を抱き合い男泣きに泣いた。表彰のときの胸中を日記に残している。

自分のために日の丸が上がり、『君が代』を聞いた。自分のためのそれを、あの2つを受け止めたことは、本当に一生忘れないだろう。

今ほど道具の整っていない当時、優勝を果たした時の彼の手は、度重なる練習により皮が裂けても畳針で縫えるほどであった。

5. その後の人生

5.1 東京オリンピック

東京オリンピックの最終予選は、8位だった。妻である俊子氏と共に望んだ東京オリンピックの最終予選であったが、夫婦揃っての東京オリンピックへの出場は叶わなかった。しかし、「その受け止め方がとっても潔かった」と俊子氏は言う。落選後も自分のことは一切言わずに代表選手の選手係として選手団に貢献した。選手係としての彼は本当によく面倒見たようで、その様子を見た他国の選手が彼に教わりたいと訪ねてくるほどであった。

国が違うことによる文化の違いこそあったが、その選手はとて信行氏を尊敬していた。そんな異国からの来訪者を彼は快く面倒見た。お互い不

慣れた英語を使いながら決して口数は多くはないが、同じ体操競技者である彼らには心で通じる物があった。

5.2 体操大使

東京オリンピック、そして日体大の助手を終えてすぐに外務省から招聘され、南米の5カ国を体操大使として体操を指導して回った。この体操大使がきっかけで大使任期が終わった翌年、ベネズエラでコーチとして1年間家族を連れて体操を指導するために再び南米を訪れる。そこで指導者としての夢を描かせてくれた一人の指導者と出会った。

メリダという所に1カ月ばかり指導に行った際に、ヘーゲルという指導者に会う。その指導者は、体操の実績は何にもなく“ただ体操が好き”ということで子どもたちを集めて体操を教えていた。“本当に体操が好き”というだけで、そのときヘーゲル氏は3つの仕事を1日でこなしながらボランティアみたいに子どもたちを教えていた。そこに相原夫妻も加わり1カ月間共に子ども達に体操を教えた。その1カ月のメリダでの指導生活は相原氏に、その後の青写真を描かせた。

5.3 三足のわらじ（大学教員・スポーツ店・体操クラブ）

昭和43年の3月3日に1年間のベネズエラでの体操指導から帰国してからは、足利工業大学で指導をしていた。しかしその翌年に、彼の父が作業現場の事故で亡くなった。そのため、お葬式を済ませてすぐに彼の父が経営していた砂利採取販売業の経営を彼が引き継がなければならなかった。6人の作業員を雇っており、その作業員が次の仕事が見つかるまで6年、父の後を継ぎ砂利採取販売業も経営した。

高校からは体操一筋だった彼にとって、今まで全く接点のない分野であった。そのため、徐々に砂利屋の経営は難航していった。そこで彼は砂利採取販売業から、“自分が生かせるものは”とス

ポーツ店を開いた。そのスポーツ店を開いた昭和48年から体操クラブができる昭和54年まで、6年、砂利採取販売業の仕事から含めると13年かけていつしか描いた念願の体育館を全て自力で建てた。そして、彼もヘーゲル氏同様に、大学の先生、スポーツ店の経営者、そして体操クラブの経営という三足のわらじを履いたのであった。自分の理想の、そして子どもたちが喜びそうな体育館を造った。南米での出会いを経、ロサンゼルスオリンピックでの逆転優勝を観て、ジュニア育成の重要性を実感した。いつまでも選手を泣すようなことではなく、次の世代の子を育成しなければ、それが体育館建設のきっかけであった。いつしか描いていた青写真は明確な目標に変わっていた。スポーツをしている人であれば誰もが思う“自分のコートや体育館が欲しい”。その夢を実現するために彼は、三足のわらじを履いた。

足工大は、群馬の自宅から50キロほど離れていた。大学から帰ると高崎にあるスポーツ店に向かった。足利工業大学に19年、その後は理事長が親戚筋に当たる上武大学に移ることになるが、日体大以外で初めてお世話になった大学だからと言って、先生の顔ぶれが一新するのを見届けてから上武大学へ移った。それから14年、日体大での助手を含めると40年近く大学で指導した。足利の大学、高崎のスポーツ店、体操クラブのある群馬の自宅と大きな三角形を描く三足のわらじ生活は彼が脳梗塞を発症するまで続いた。体操クラブのために建てた体育館の建設費の借金は相原体操クラブ創立30周年の年までかかった（45才～75才）。夢のために履いた三足のわらじを履ききった。それが彼にとってのプライドでもあり、そして生きがいでもあった。

6. ご遺族から見たオリンピック選手である夫

体操でも人生でも金メダル。それが妻俊子氏から見た彼の姿である。

体操に対して誰よりも体育館で時間を費やし、

体育館の外にも器具を持ち込んで練習した。人の見えないところでも努力をし、24時間体操のことを考え、アイデアが浮かんだらすぐに実行しなくては駄目なアイデアマン。体操を大事に想い、体操に馳せた夢を一つずつ実現させていった。

人を傷つけない人であり、そして誠実な人だった。

こういう人生も少ないですよね。人間的にもすてきな人だったですけどね。それはやっぱりね、彼の胸の中に金メダルがあったからだと思います。自分を律することも含めて。本当に、普通だったら人間の体力の限界に挑戦した人間ですよ。それが、手足が動かなくなるっていうのはとっても切ないと思うんですね。それを一度も口にしなかった。全て自分の今を受け止める人。よっぽどですよ。愚痴も出たろうと思うし、時には短気を起こしそうになることあったと思うんですけどね、一度も私責められたことないの。本当にそれはね、すごいと思います。だからね、人間としての金メダルって言ったのは、そういう意味。しんどさも喜びも、私は一緒に味わってきた人間ですからね、たまにはもうね、それこそ、吐き出してもいいと思うんですけどね、一切しないで逝った人。

俊子氏が大学生の頃からずっと見てきた信行氏はその姿は、体操に生きて体操に亡くなった体操一筋の人生であった。そして、その胸には体操だけでなく人生の金メダルがあった。

(受理日：2017年2月26日)

